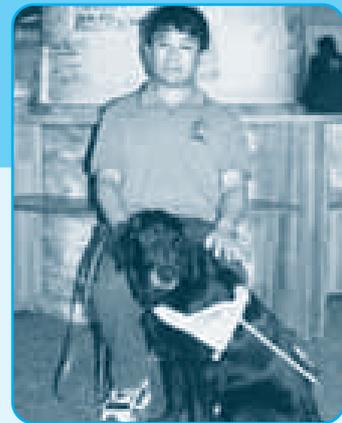




「盲導犬」への理解と協力、 そのかわり方を呼びかける



佐木 理人さんと「ブルック」

「盲導犬」として、「ブルック」(雌、7歳)を5年前から伴っている。それまでは、白い杖がパートナーだった。1995年、駅で電車で巻き込まれて線路に転落し、重傷を負った。そのことが、「盲導犬」を持つ直接のきっかけになったが、その前年に自身が主宰しているグループのメンバーと、「盲導犬」の訓練所を訪問したことで、『盲導犬』っていいなあと感じ始めていた。

生まれつき弱視で、小学校、中学校は弱視教育のある大阪市内の学校に通った。中学校の1年生の時に全盲になり、「自分で生活できるようにとの両親の願い」から、高校は東京の盲学校に進学し、3年間、寮での生活を送った。その後、大学、大学院で英文法を専門に学んだ。

元々、行動的だったが、「ブルック」を伴ったことで、さらに行動範囲が広がった。「ためらいなく、どこへ行くにも安心して、早く移動ができるようになりました。『盲導犬』を伴っているということで、多くの人たちが知ってくれて、人間のつながりができてきたように思います」。

日頃は、ピアカウンセラー(用語解説参照)として、「視覚障害者」からの相談に奔走する。合間を見て、特に幼稚園、小学校、高校に足繁く通い、「盲導犬」の育成の過程を説明し、「盲導犬」を使ったクイズなどを行いながら、「視覚障害者」や「盲導犬」への理解と協力、そのかわり方を呼びかける。「『盲導犬』を伴っている私たちの責任ではないかと思っています」と力強く語る。